エレナ・イワノヴナ・レーリヒ（はしがき④）

シーナ・フォスディック

ニコライ・コンスタンティノヴィチ・レーリヒについては、多くの綿密で素晴らしい記事が書かれていますが、これまで彼の妻エレナ・イワノブナについてはほとんど書かれていません。それでも、ニコライ・コンスタンティノヴィチ自身の言葉によると、彼女は疲れを知らない仲間であり、彼の芸術にインスピレーションを与えました。

N・K・レーリヒがエレナ・イワノヴナについて記事「A Great Image」で書いたことは次のとおりです。「ここで私たちは、現代の注目すべき人物、傑出したロシア人女性に遭遇します。幼少期にも非凡な素質を見せた彼女は、重いドレの聖書を密かに持ち歩いている少女の姿をしています。その重さにかがみ込んで大人たちに隠しながら、絵の勉強をするために、そして（読めるようになったら）聖書の勉強をするために、その宝を手にしたのです。珍しくも、幼い頃彼女は父親の本棚から哲学の本も手に取っていました。騒がしくて気が散りそうな環境の中で、彼女はまるで昔から持っていたかのような深い人生観を育むことができました。誠実さ、正義、常なる真理の探求、創造的な仕事への愛。これらすべてが、実際には強く若い精神を取り巻く人生全体を変えていったのです。そして、家全体、家族全体が、同じ慈悲深い主義によって導かれるようになりました。すべての困難と危難は、同じストイックなリーダーシップの下で耐えました。蓄積された知識と完璧を目指した努力が、問題の解決に勝利をもたらし、周囲の人々を光明の道へと導いたのです。無知、闇、悪意は常に鋭く感じ取られました。可能な限り、肉体的および精神的な癒しが行われました。人生は真の労働に満ちたものになりました。朝から晩まで、すべてが人類の利益のために行われました。最も幅広く文通が続けられ、本が書かれ、多くの巻数の著作が翻訳され、これらすべてが驚くほどの疲れ知らずの精神で行われました。最も困難な状況であっても、真の直知識となる本当の信仰によって克服されました。確かに、そのような知識を得るためには、素晴らしい積み重ねが必要です」。

エレナ・イワノヴナ・レーリヒはとても私的な人でした。数年間一緒に仕事をしていて、彼女と私が仲良くなってから初めて、私は彼女自身のこと、子供の頃のこと、青春時代のことなど、多くの話を記録し始めました。エレナ・イワノヴナは1879年2月12日、建築家I.I.シャポシニコフとその妻エカテリーナ・ヴァシリエフナの家に生まれ、偉大な将軍の孫娘ゴレニシェフ・クトゥーゾフとして生まれました。エレナ・イワノヴナは敏感な子供で、非常に多感で鋭い観察力を持っていました。幼い頃から自然の中の美しさと色の調和を愛していました。彼女は才能あるミュージシャンとして早くから期待されており、演奏家としての明るい未来を予想されていました。絵を描くことが好きで、生涯を通して色彩感覚を研ぎ澄ましていました。

1899年、彼女はN・K・レーリヒと出会いました。エレナ・イワノヴナとニコライ・コンスタンチノヴィチは、二人が多くの共通の関心事を持っていることを発見しました。二人は恋に落ち、すべての障害にもかかわらず、しっかりと二人の人生を一緒にすることを決めました。二人の結婚式は1901年10月28日に行われました。ニコライ・コンスタンチノビッチの考古学的探検旅行には、その時からエレナ・イワノヴナが含まれました。その中で最初に、ノヴゴロド、プスコフ、ロストフ大王、ヤロスラブリ、スモレンスクなどのロシアの偉大な都市への旅がありました。ニコライ・コンスタンチノヴィチは、古代の物語、建築物、昔ながらの衣服などを数多くのスケッチや絵画に収めています。彼は常に彼女の芸術的な直感と洗練されたセンスを尊重していたため、新しい絵はすべて最初にエレナ・イワノヴナに見せました。エレナ・イワノヴナは教会、街の城壁、フレスコ画などを撮影し、その写真は、美術界でも高く評価されていました。それが彼らの、共同の創造の始まりであり、それは彼らの生涯を通じて続きました。

私が初めてレーリヒ一家に会ったのは、1920年12月4日にニューヨークで開催されたニコライ・コンスタンチノヴィチの第一回目の展覧会でした。キングコア・ギャラリーは、多くの来場者で溢れかえっていました。N・K・レーリヒの絵画、その主題、色彩の調和、誰にとっても新しいロシアの芸術は、すぐにアメリカの観客を魅了しました。夫と私は、この偉大な芸術家に会いたい、彼の芸術に感謝の気持ちを伝えたいと思い、人混みの中を苦労して歩いてきました。ニコライ・コンスタンチノヴィチは温かく迎えてくれ、エレナ・イワノヴナは、私たちの母国語で話しかけられると嬉しそうに微笑んでくれました。彼女の美しさを今でも鮮明に覚えています。その日の夜、レーリヒ家のご夫妻は、ご夫妻が泊まったホテルに私たちを招待してくれました。最初の瞬間から、ロシアの芸術や文化をアメリカ人に知ってもらうという将来の計画を話し始めました。N・K・レーリヒは、アメリカに芸術教育機関を設立するつもりであることを話し、私たちを招待してくれました。私たちは、自分たちの生活や音楽活動のこと、またアメリカの一般市民の間では文化的な関心が低いことなどを話しながら、夜中の12時過ぎまで話をしました。

翌日、N・K・レーリヒは、彼とエレナ・イワノヴナが事前に開発していた連合芸術マスター学院（the Master Institute of United Arts）の仕事の具体的な計画を私たちに教えてくれました。私たちは、1921年に開校し、才能ある教師と多くの学生を徐々に惹きつけてきたこの学校の正式な認定のための仕事を始めました。N・K・レーリヒは私たちに、建設的な築き方と、芸術を理解する方法を教えてくれました。彼は、私たちが「20の大学で同時に勉強していた」ことを的確に指摘し、労働の喜びと生活への知的応用について語りました。エレナ・イワノヴナは、意識の成長の必要性を指摘しました。また、彼らはインドへの魅力を語ってくれました。

レーリヒ一家は1922年の夏をモンヒガン島で過ごすことにしました。夫と私は7月に彼らと合流しました。これは忘れられない時間の始まりでした。日々はあっという間に過ぎていきました。ニコライ・コンスタンチノヴィチとエレナ・イワノヴナとの朝の散歩の思い出は、私の一生の思い出となったのです。偉大な芸術家であり、賢明な人であったニコライ・コンスタンチノヴィチの言葉をよく覚えています。彼は岩や海岸線を描き、自分の周りのあらゆるものをよく観察し、あれやこれやの色の濃淡や雲の形を指摘していました。彼ははっきりと話し、すべての言葉を記憶に刻み込んでいました。エレナ・イワノヴナは、2、3時間一人で仕事をするのが好きなので、とても早く起きました。彼女が私たちに加わったとき、私たちの幸せは完全なものとなりました。彼らは考えを交換し、私たちは彼らの言葉に耳を傾けます。歩き疲れた私たちの足の軽さと体力は尋常ではありませんでした。日中は、二人とも私たちと一緒に仕事をしていました。N・K・コンスタンチノヴィチは、今後数年間の施設の発展計画を指示した。エレナ・イワノヴナは、私たちに勉強するための本を与えてくれ、それについて話し合ってくれました。古代の教えと東洋哲学に関する彼女の知識は、並外れていました。彼女の助けを借りて、私たちは人類の進化の歴史を研究しました。

当時、エレナ・イワノヴナは、女性の意識を目覚めさせる必要性について多くのことを考えていました。知識と美への努力の必要性を強調し、アメリカの女性の生活を悲しみをもって観察していました。後にエレナ・イワノヴナはこう書いています。「人々の分離と退化が進み、真の生命の源であり世界の進化につながる存在の最高の原理がすべて忘れられてしまったこの苦難の時代に、人生のすべての行動において、無私の達成の火を復活させようと呼びかける女性の声を上げなければなりません。女性は、母であり妻であり、人間の非凡な才能の発展の目撃者であり、思想と知識の文化の偉大な価値を理解することができます」。プライベートな会話の中で、本や手紙の中で、彼女はしばしば、人類の進化における女性の役割について話していました。「女性は……美しさを保ちつつ、心の柔らかさ、感情の繊細さ、自己犠牲、忍耐の勇気を失わないようにしましょう」。

エレナ・イワノヴナは美しい女性でした。輝く褐色の目、繊細な顔立ち、笑顔、栗色で白をふんだんに使った豊かな髪、日焼けした顔のわずかな赤み、軽快な足取りなど、すべてが魅力的でした。彼女の息子スヴェトスラフ・ニコラエヴィチが描いた彼女の肖像画は、驚くほど正確です。V・セロフによる肖像画は、芸術的には美しいですが、エレナ・イワノヴナの真の姿を捉えていないのです。（\*1 ）彼女の知性と高い精神性は、その美しさと完全に調和していました。彼女は深い尊敬を集め、エレナ・イワノヴナやニコライ・コンスタンチノヴィチに出会ったアメリカの芸術家、作家、科学者たちは、彼女の助言に耳を傾けました。

こうして、仕事と会話に満ちたモンヘガンの日々が過ぎていきました。レーリヒ夫妻は、サンクトペテルブルクでの生活や、作家、詩人、音楽家、作曲家との出会いや交友関係についても話してくれました。夫妻はしばしば、クインジーについても長く語ってくれました。ニコライ・コンスタンチノヴィチがそう呼んだように、クインジーを著名な芸術家や教育者としてだけでなく、「人生の教師」と呼びました。私たちにとってレーリヒ家は、文字通り「人生の教師」でもあったのです。私たちのグループの他のメンバーにも、知識が惜しみなく与えられ、自己規律と労働の喜びが示されました。エレナ・イワノヴナは、子どもたちの体育および道徳教育の必要性や、後にロシアで働く夢について、幅広く語ってくれました。彼女は素晴らしい母親で、彼女とニコライ・コンスタンチノヴィチの賢明な指導の下、ユーリとスヴェトスラフは成長しました……一人目は優れた科学者でもある東洋学者に、二人目は偉大な芸術家に成長しました。

1923年12月、レーリヒ一家はインドに到着し、中央アジア遠征の準備を開始しました。いくつかの新たな事情により、N・K・レーリヒはこれらの準備を保留にし、1924年11月に短期間の間アメリカに戻りました。彼は約1ヶ月間私たちと一緒に過ごし、私たちの施設の発展計画についての詳細な指示を残し、また、彼がアメリカを離れている間に私たちが設立した、彼の名前を受け継ぐ博物館の計画についても熟知しました。一人の芸術家の作品を展示するこの美術館は、当時のアメリカで唯一のもので、多くの噂と羨望の対象となっていました。ニコライ・コンスタンチノヴィチは、そのことを知っていて、1924年3月にインドから私たちに手紙を書いて送って来ました。

「…状況が案内した場所に、目的の浄化の炎を運ぶようにしなさい。何が原因でこのような特殊な結果が引き起こされるのか、誰が知ることができるだろうか？ 芸術家の創作物を、その作者が偶然生まれた出生地に縛りつけておくことが、最高の影響を与える場所に置かれるということであると、誰が主張できるだろうか？私は何度もロシアで発見された様々な美の形について話し、ロシア人の内的な重要性を指摘してきたので、そう言うのは特に簡単だ。それなのに、なぜ私たちは今、未来に目を向けないでいられるだろうか。そして本当に、どの石が将来必要とされる建設のための最高の基礎を提供するのか、と言うのは難しいことです。もし私が若い国の素晴らしい側面を見たら…なぜそれは私に東の知恵のすべての贈り物で種を蒔いたロシアの宝庫のことを忘れさせなければならないのでしょうか？ 本当に、否定は少なくなり、無知は少なくなり、そして国境は拡大し、輝かしい機会は美しさの花輪の中に自分自身を織り成すだろう」。

N・K・レーリヒがインドに戻ると、遠征の準備はすぐに完了しました。この遠征は数年に及ぶと予想されていたため、当初からマスコミや一般の人々の関心を集めていました。N・K・レーリヒは多くの記事の中で、遠征の道のりや困難に遭遇したことを詳しく述べています。ニコライ・コンスタンチノヴィチの『日記帳』の中で、エレナ・イワノヴナが遠征中に経験した苦難について、『ラダ』の記事の中で述べられている言葉を紹介しておきましょう。「エレナ・イワノヴナは、私たちと一緒に馬に乗ってアジアを横断し、チベットで寒さと飢えに苦しんだが、いつも最初にキャラバン全体に陽気さを示していた。そして、危険であればあるほど、彼女は明るく、準備ができていて、喜びに満ちていました。脈拍140の彼女は、毎日のキャラバンの運営にも、道中で遭遇したすべての問題の解決にも個人的に参加しようとしていた。彼女の不機嫌な姿や絶望は誰も見たことがなく、その理由は様々であった」。

そして、後に『四十年』と題された別の「日記帳」の中でN・K・レーリヒは、彼がエレナ・イワノヴナのほかの呼び名としてラダと呼んでいた彼女について、このような素晴らしい言葉を書いています。

「40年はかなりの期間だ 。このような長い航海では、多くの外部からの突風や嵐に遭遇した。我々は様々な障害物を共に通過した。そして、障害物はチャンスに変わった。私は私の本を、妻であり、友人であり、仲間であり、インスピレーションの与え手であるE・I（エレナ・レーリヒ）に捧げた。これらの概念は人生の試練で試された。ペテルブルグ、スカンジナビア、イギリス、アメリカで、私たちは仕事をし、勉強し、意識を広げた。私たちは一緒に創造したのだが、作品には男性と女性の2つの名前がつくべきだと言われていた。いつものように、最高の経験は記録に残らない。多分、言葉自体がそれらを説明するのには適切ではないのだろう。ラダの労働と知識はどこにも記録されていない。私は彼女の哲学的業績についても言及していない（そのいくつかは友人への手紙の中に含まれており、5つの偽名で出版されている。［\*2］生きている間にそれらのベールは取り払われるだろうか）。馬に乗ってチベットやモンゴルを横断したことはほとんど語られていない。馬に乗って山や川、砂漠を越えた女性が大勢いるだろうか。彼女の千里眼の才能はどこにも言及されていないが、私たちはすべて目撃している……今日では戦争が生活のあらゆる面を汚している。便りが途絶えた 多くの友人の運命は不明である。本や資料は破壊されたかもしれない。協会は弾圧された。人間の思考は束縛の中にある。文化の破壊者たちは、文化を救おうと叫んでいる。知識は消滅した。ヒューマニズムは忘れ去られた。芸術は忘れられた。ハルマゲドン！ 親愛なるラダ、今日は私たちの調和のとれた道を共に歩んできた40年の節目だ」。（１９４１年１１月１０日）

インド遠征から帰ってきたレーリヒ夫妻に創造的な人生の新たな時期が始まりました。1928年、N・KとE・I・レーリヒは、ヒマラヤ科学研究所「ウルスヴァティ」を設立しました。エレナ・イワノヴナが初代学長に選ばれました。研究所の名前「ウルスヴァティ」は、サンスクリット語で「朝の星の光」を意味します。この詩的な名前は、インドでエレナ・イワノヴナに最初に与えられたものです。彼女の著書には、『仏教の基礎』『ラドネジの聖セルギイの旗』、「手紙2巻」などがあります。

エレナ・イワノヴナのすべての願望は、祖国に向けられていました。彼女は、これらの予言的な言葉を残しています。「ロシアの再興は全世界の繁栄と平和の保証です。ロシアの破壊は、全世界の破壊です。今、このことに気付き始めた人もいます。しかしごく最近になって、人々はその逆、すなわちロシアの滅亡が世界の救いになると考え、ロシアを滅ぼして離反させようと全力を尽くしました。ロシアの成長に対する恐怖は大きく、この恐怖には理由があったとしても、誰もそれを真の原因に帰する者はいませんでした……。ロシアの爆発的成長の結果は大きいです。広範な国家的協力の新しい基盤の上に浄化され、再生されたロシアは、真の平和の防波堤になるでしょう」。

S・G・フォスディック

＊＊＊＊＊＊

脚注

\*1 ヴァレンティン・アレクサンドロヴィチ・セロフ（Valentin Alexandrovich Serov, 1865-1911）：画家、グラフィック・アーティスト、著名な肖像画家、ヘレナ・レーリヒの有名な肖像画の作者。

\*2 エレナ・レーリヒのペンネーム：N・ヤロフスカヤ（『ラドネジの聖セルギイの旗』）、N・ロコトワ（「仏教の基礎」）、T・スンドリ（年鑑『オカルティズムとヨーガ』の記事）、J・サン・ヒレア（『東洋の十字路について』）、イスカンデル・ハヌム（マハートマ書簡集『東洋の聖杯』の編纂と翻訳）。

（星野 未来 訳）